

第38回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校1年生の部 最優秀賞

「生きる」ことの大切さ

弟子屈中学校 山崎 美玖さん



「差別」。この言葉がこの本の中に何回も出てくる。決していい言葉ではない。

自分は、差別という差別を、受けたことはない。でも、差別を受けている人なら何人か見た事がある。理由は、色々ある。プスだから、何となくムカつくからなど、理由の中で一番多いのはこれだと思ふ。直接、自分が差別されていなくても、見ているだけでも、気持ちよくはない。けっこん腹が立つ。

でも、この「平和の祈りを込めて、光の中のアンネ・フランク」という本は、今まで、私が見てきた、どんな差別よりも、残酷で、ひどい。それは、ヒトラーがユダヤ人に対してした差別である。

おもに、この本は、ユダヤ人のアンネがヒトラーによる、ユダヤ人迫害のため、隠れ家に隠れている間に書いた、アンネの日記、ユダヤ人に対する、人種差別のことが、書かれている。アンネの日記の背景にあるのは、ヒトラーを党首とする、ナチスのユダヤ人迫害で、ユダヤ人絶滅を目標にした、人種差別だ。こんなにひどい差別なのに、このユダヤ人迫害の理由は、あまりにも複雑で、神秘で、ユダヤ人自身にも、よくわからないようだ。

「隠れ家」という、自分には想像つかない生活。そのつらさを「アンネは隠れ家の中で強いられました」という言葉が表している。

でもアンネは、そんなに大変な生活をしていても、「生きる」ということを真剣に考えた。

「ただ、生きるのではない。価値のある人生を生きたい」という言葉がある。私はこの言葉がすごく心に残っている。もし自分だったら、こんな大変な中で、こんなこと、考えられないと思っただらだ。きつと、「いつ死ぬんだろう?」といつも考えていそう、アンネはすごいなと思った。それも、こういう風に考えていたのは、自分と同じ十二才の時。ますますすごいと感じた。今の人は、何かいやなことがあれば、自殺することを考えて、アンネのように、そこまで真剣に考えていない。アンネは、そうは絶対しなかった。何かを、アンネから教わったような気がする。

私は、この本を読んで、命の大切さ、「差別」という、深い意味を持つ言葉の残酷さを知った。ユダヤ人迫害によって六百万人という、多大な人数の人達が命をおとした。この六百万人の人たちは、どんな気持ちで、死んでいったのだろうか。どんな事を考えて、亡くなっていったのだろうか。それは、だれにもわからない。でも、気持ちよく、「幸せだった」という気持ちで亡くなった人は一人もいないだろう。人種差別……。これから先、こんなことが二度とあつてはいけない。た

だユダヤ人だから、という理由で、強制収容所へ送られ、そして殺されて。同じ人間だとは、思えない。思いたくもない。命は、何よりも大切。この本を読んで、生きることを真面目に考えた。

命は、一生大切にしたい。何か、何かでもいいから、価値のある、目的や目標のある人生を送りたいと思っ。

書名「光の中のアンネ・フランク」

「平和への祈りを込めて」
篠 光子 著

(寸評)「ユダヤ人への迫害」というあまり身近ではないテーマを「自分の身近で起きている差別」と結びつけて考えていた点がよかったです。また、差別という言葉の深い意味に気づいたり、「命の大切さ」「生きるということ」について真剣に考え、これからの人生、生き方と結びつけて考えている点が素晴らしいです。



■中学校2年生の部 最優秀賞

心をそろえて

弟子屈中学校 西郷 綾夏さん



今は夏休み。この時期練習しなければならぬものがある。それは我が中学校の文化祭で行う、合唱コンクールでのピアノ伴奏だ。毎年十月にある合唱コンクールで、課題曲と自由曲を披露する。その為私達は、夏休みにCDを聞き、歌を覚えたり、音合わせをしたりするのだ。去年私は、課題曲も自由曲も伴奏であった。夏休みは毎日の様に練習していたのを覚えている。結局、一年のコンクールでは賞に入ることが出来なかったが、とても良い思い出だ。

今回私が読んだ「くちびるに歌を」という本は、中学生のNHK合唱コンクール、通称Nコンを舞台としたお話。この本の主人公は二人。一年生から合唱部に所属していて、男子を嫌う仲村ナズナと、三年生になってから入部してきた、いつも独りぼっちの桑原サトルだ。二人が三年生になると同時に、顧問の松山先生が出産、育児の為休職し、代わりにとても美人の柏木先生が顧問になる。柏木先生目当てという、不純な動機で入部してきた男子部員と女子部員の間は険悪だった。ある日、合唱部長の辻エリが真面目に練習しない男子に激怒する

が、一向に練習しようとしなない。雨が降る空の下、屋上でムカムカする頭を冷やしていた。そのせいでその後かぜをひいてしまい、何日もの間学校に来れなくなってしまう。責任を感じた男子は、いつも一生懸命練習をしているサトルに歌を教わって、熱心に練習をするようになった。そのことを聞いた辻エリは、再び学校へ来る様になり、そして男子部員、女子部員の対立は無くなった。NHK合唱コンクールを迎えた当日は松山先生の出席と重なってしまった。心配する部員達は「松山先生に電話をつなげたまま歌う」ことを決め、ステージに上がった。課題曲、自由曲を松山先生のこと、家族のこと、将来のこと、自分のことを思い歌いあげた。松山先生の出席も無事成功した。全国大会には行けなかったが、自分には一緒に歌ってくれる仲間がいるということのありがたさを知った。

去年、私はピアノ伴奏に苦戦した。二学期には学力テスト、中間テストがあり、勉強とピアノを両立しなければならなかったからである。他にも文化祭の新聞作りで帰宅が遅くなり、やるのが一杯だった。こんな忙しい毎日とうんざりした。「やりたくないけれど、学校で決まっているから仕方ない」と思ったりもした。そして何とか練習を重ねて上手になった。コンクール本番、優勝したのは三年生だった。歌も素晴らしく感じたが、何より、優勝発表に歓喜する姿が感動的だった。

今回読んだ「くちびるに歌を」で、私は

「声をそろえること」で心もそろったと確信した。それは正に、優勝した三年生そのものだった。男子と女子がバラバラだった合唱部も、本気で歌うことになって一つになった。私も仲間と一緒に練習し、一緒に一つの目標へと進み、一緒に歌える仲間がいるということに感謝したい。

本の中に十五年後の自分が、今の自分に宛てる手紙について書かれていた。十五年後も、仲間とくちびるに歌をしたことは、私の素敵な思い出になるはずだ。

書名「くちびるに歌を」

中田 永一 著

(寸評)何かに取り組み時、メンバーの心が同じ方向を見ているのは大事なことです。西郷さんは登場人物と自分の状況を重ねて「一緒に歌える仲間がいることに感謝したい」と述べました。読書を通して普段の生活を振り返るといのは他の皆さんにもお勧めしたい読書の在り方です。今後ますます本に触れてみてください。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
成24年度当時のものです。